

V 紀要

—子ども参加プログラム報告書—

日本画のよさと鏗木清方の芸術を伝えるために

宮崎 徹

はじめに

鎌倉市鏗木清方記念美術館は、平成 10 年に開館した。特別展を年3回と、収蔵品展を前後期含めて6回程度行い、その他に美術講演会を開催してきた。

その中で教育普及事業の強化が求められるようになり、より多くの人々に鏗木清方の業績と作品を理解していただくため、15 年度から学芸員等による展示解説を開始した。

また、将来を担う子どもが楽しめる企画の必要性を感じ、他の美術館にない当館ならではの子どものためのプログラムを研究した。その中で、他の美術館・博物館の子どもを対象にした普及事業では、単純に絵を「描く」企画よりも「ものづくり」を主とした企画が多く実施されており、清方の画業に結びつくものは少ないと感じていた。

そこで、当館は「日本画家 鏗木清方」の記念館であり、「描く」ことにこだわったプログラムを、義務教育の範囲である小・中学生を対象に開催することとした。

1 初めての子ども参加プログラム

小規模館の抱える課題の解決 それまで、子ども参加プログラムを全く行ったことがない上、予算の苦しい状況で、参加者に喜んでいただけるようなことが出来るのかという疑問があった。

また、実施する場所の確保も課題であった。ワークショップ・ルームはもちろんのこと会議室などの別室はない。美術館へ入ってすぐの空間で約 5.0m×4.3m の「ホール」と称している床の間に接した場所しか実施できるスペースがなく、そこを使用する場合は、観覧のための来館者の妨げにならぬよう、十分配慮しなければならない。そこで実施する時間帯は、入館者の少ない午前中に定めて解決した。

さらに、作業する机もなく、たとえ机を購入しても使用しない時に収納する倉庫もない。レンタルでは毎年のランニングコストがかかるため、当館としての負担は大きい。これら予算、空間、設備、人員などの欠如といったことは、まさに小規模の美術館が直面する問題である。

当館では、図書コーナーとして活用できる分とチラシを置くための台、受付で来館者がカバンを置いて中身を見る事ができるようにする台として、常にどこかに設置できる分の長机だけを、何年度かにかけて少しずつ購入することにした。従って参加人数も限られてくる。

また、子ども参加プログラムを長く続けていくためには、どのように美術のプログラムを進行するか、子どもたちをどのように指導するかを、学芸員が学ぶ必要があり、学校を退職された元美術教師・萩原秀雄氏に監修をお願いした。

2 第1回 <平成 18 年度 夏> 「巻物に絵を描こう」

テーマ決め 第1回目は平成 18 年度の夏に行くことになった。子どもにとって、魅力的なプログラムとは何かを模索した。巻物に絵を描くのは新鮮であろうと考え、タイトルを「巻物に絵を描こう」とした。子ども向けの番組などで忍者が巻物を手にすることもあり、参加者はその形態などで表された作品の解説を聞きながら鑑賞した上で、絵に表現された時間の流れを認識しながら作品を制作するプログラムを考えた。その時の展覧会にはいくつか時間の経過が表現されている作品を展示した。

鏗木清方の作品《寺子屋画帖》には、清方が観劇した芝居の印象が場面を追って右から左へ描かれている。《霽れゆく村雨》(小下絵)では、にわか雨にさいなまれている女性の左の池面には反射した虹が描かれて、すぐに天気が回復することが暗示されている。これらの作品を鑑賞し、日本画では右から左へと時間が流れていることをまず伝える。

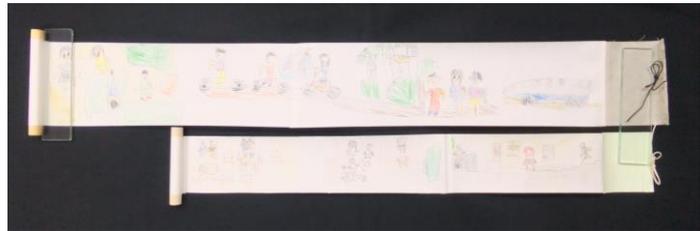
さらに、《朝夕安居・朝》(下絵)も同時に展示した。《朝夕安居》は、明治中頃の東京風情を朝昼夕の三場面に分けて描かれている。「朝」には新聞配達や、豆屋の行商、井戸での水汲や立ち話の場面、「昼」には暑い陽射しを避けるようにして百日紅の木蔭で休む風鈴売りが描かれ、「夕」は行水の様子、ランプの火屋の掃除をする女性、辻茶屋や辻占いが描かれている。

これらの作品の筆遣いを十分に鑑賞した後、参加者には「朝」「昼」「夕」の三場面を描くため、自分にとっての夏の一日を前もって考えてくるように伝えておいた。

準備と監修 日本画を描くにはかなりの技術がいるため、初回でもあり、描く道具は色鉛筆と上質紙にした。ただ、巻物の雰囲気を出すために、表具をすることにした。美術館の表具を請け負っていただいていた佐藤良雄氏(故人)に相談すると、表具用の高級な布に裏打ちを施して、こちらが希望した紙のサイズ(作品の画面サイズ 76.0×11.0cm)に大きさを揃えて(表具サイズ 11.0×10.5cm)ご寄付いただいた。



その表具と上質紙を糊付けし、軸にはホームセンターで購入した直径1.5cm の木の棒を14.0cm の長さにカットして用い、糊付けした。表具と紙をつけた反対側には籤を巻き込み、その中心に穴を開けて紐(30.0cm)を通し、巻子を結べるようにした。



想定したプログラムの内容を試験的に実地で行い、時間内に描けるかどうかを確認した。(写真は試験的に実施したサンプル)

プログラムの流れ 実施日は、夏休み中の7月27日(木)、8月3日(木)、10日(木)の三日間、時間は午前9時30分から10時30分までの1時間を基準とし、参加者の出来具合で12時までとした。各参加者たちにはまず、プログラムの目的や制作手段を記したワークシートを配り、プログラムの目的を伝え、美術館や日本画の簡単な紹介をし、記念館が清方の終の棲家にてきた美術館であることや、日本画の基本的なことを説明した。その後、展示室に移動して清方の巻子を鑑賞し、描かれている作品の中から時間の流れを学んだ。そして席に戻り、参加者それぞれが用意してきた画題について、時間の流れを意識しながら描いてもらった。



参加者が選んだテーマは、一日の旅行や花火を見に行ったこと、テーマパークで遊んだことなどであった。3日間で24人が参加した。

展示 できあがった作品はしばらく預かり、鎌倉駅の地下を東西につなぐ自由通路に設置されている「地下道ギャラリー」に9月20日から26日まで展示した。巻子を壁面に飾ることはかなり困難であったが、ワイシャツを販売する時に使う型などのアクリル板を切って組み立て、軸と八双、そして本紙の中央部をしっかりと挟み込んで固定できるものを手作りし、それをピンで壁面に止めて飾った。

評価と課題 参加者には好評であった。特に、事前に展示室で作品を観察してから描いたことや本物の表具を用いていたこと、巻物という形態に描くことが新鮮であったようだ。

予算がないことと人員がいらないため、準備はほとんど一人の担当が行うことになった。巻子づくりも大変であったが、それを展示するために作ったアクリルの押さえは工夫が必要で、完成に時間がかかった。また、地下道ギャラリーで展示後に返却するので、制作時の熱が冷めているためか、なかなか引き取らない参加者もあり、すみやかに返却する方法を考えることも必要であった。

使用した素材に関しては、日本画の素材にもう少し近い制作物であった方がよかったのではないかとも思われた。

3 第2回目から現在に至るまで

第2回 <平成19年度 春> 「錦木清方のスケッチを写そう」

実施日 4月3日(火)、4日(水)

絵を描くことの基本に模写がある。清方は、花々のスケッチをいくつも残している。それは制作時の参考にされており、様々な作品に草花を見出すことができる。しかし、野外で安全を確保しつつスケッチ指導を行うにはスタッフが少なく、又、庭でスケッチを行うことによって近隣の住宅に子どもたちの視線が長く向くことや、話し声が抜けることは避けなければならなかった。そこで、清方のスケッチを臨模するプログラムを行った。

当日は、展示室で鑑賞した後、18種類ある清方の複製画から好きなものを選び、臨模した。2日間で11人が参加した。

色鉛筆は手軽に描ける画材であるが、日本画からは距離があり、その距離を埋める工夫をしなければならなかったと感じた。



第3回 <平成19年度 夏> 「うちわに絵を描こう」

実施日 8月10日(金)、16日(木)、17日(金)

錦木清方の絵をより深く知るためには、日本画の画材に触れる機会を増やす必要性を感じていた。そこで、日本画を描いている方にボランティアをお願いして、プログラムで筆遣いや描き方のレクチャーを行うことにした。この時にご協力をいただいた松岡美樹子氏(院展)には、その後も長くご支援をいただいている。

本格的に日本画を描くには準備を含めるととても長い時間と費用を要する。それを解決するため膠を溶くという段階を省略して、学校で学んでいる水彩画を扱う感覚で描ける角顔彩を用いることにした。最低限の画材である、面相筆・丸筆・平筆を用意し、雰囲気を出すために絵皿も一人一枚ずつではあるが用意した。

展示室で清方の筆遣いや色の配置を学び、その作品を味わった。松岡氏の実演により、面相筆・丸筆・平筆それぞれの味わいある筆遣いを示した。学校教材用のうちわに、鉛筆で下描きして角顔彩を用い、様々な筆遣いで表わされる表現方法を学んだ。

3日間で22人の参加者があった。



第4回 <平成20年度 春> 「新学期の夢や希望、決意を色紙に描こう」

実施日 4月2日(水)、3日(木)

新学期を向かえ、児童生徒はその一年の夢や希望、決意を具体的な絵と文字にして色紙に描いた。この時も前回の日本画材と同じものを使用した。角顔彩を使うプログラムは二回目であり、前回のうちわのように描く面がでこぼこではないため、参加者もスムーズに描くことができた。ただ、日常消しゴムを使い慣れているため、気軽に繰返し使用した結果、色紙の礬砂がとれて滲んでしまうこともあった。文字の配置と全体のバランスのとおり方を考えることも参加者には新鮮で楽しめたようだ。2日間で15人の参加があった。



第5回 <平成20年度 夏> 「鳥獣戯画を模写しよう」

実施日 7月30日(水)、31日(木)、8月7日(木)

清方の絵を鑑賞してその筆遣いや色使いを感じ取ってから各自席に着いた。筆遣いのレクチャーを受けた後、日本画用の薄美濃紙に、鳥獣戯画の複製画から墨と筆を使って写し取った。彩色はしないが、絵に動きがあるため、参加者は十分にプログラムを楽しむことができた。特に、筆遣いだけで様々な表現が可能



であることを知ることができた。筆の流れの方向までまねできればさらによいものになったであろう。3日間で23人が参加した。

第6回 <平成21年度 春> 「錦木清方のスケッチを模写しよう」

実施日 4月2日(木)、3日(金)

展示室で作品やスケッチ、筆遣い、色使いを味わい、会場で筆の運び方などを学ぶ。平成19年度に使用した清方スケッチの複製画を用い、今度は礬砂引きの美濃紙に鉛筆で下書きをした上で、角顔彩と和筆を使って模写を行った。色鉛筆を用いた時とは違い、筆の流れによって多様な表現がなされた。2日間で16人が参加した。



第7回 <平成21年度 夏> 「日本画材を使って絵日記を描こう！」

実施日 7月30日(木)、31日(金)、8月7日(金)

初めに清方の絵日記を観察した。さらっとした筆遣いで絵と文字を表し、しかもバランスの取れた画面構成に描き上げられた作品を鑑賞した。筆遣いを学んだ後、あらかじめ考えてきた絵日記の主題を、礬砂引きの美濃紙に鉛筆で下書きをした上で、角顔彩と和筆を使って絵日記を完成させた。3日間で25人が参加した。



第8回 <平成22年度 春> 「日本画材を使って和玩具を描こう！」

実施日 4月2日(金)、3日(土)

和玩具は余り日常に存在しなくなってきたが、正月や節句などに飾られることがある。ここでは、日本画材を使って日本独特の物を写し、和の文化に親しめるプログラムを行った。

展示室で鑑賞し、筆遣いを学んだ後、静物を鉛筆で写し取った。角顔彩と和筆を用いて対象をいかに表現するかを学んだ。2日間で19人が参加した。



第9回 <平成22年度 夏> 「ミニ屏風に日本画材を使って絵を描こう！」

実施日 7月29日(木)、30日(金)、8月6日(金)

日本画の形態の一つである屏風について親しむため、学校教材用のミニ屏風を用いた。屏風の使用目的を伝え、部屋の装飾的効果があることを理解した上で、展示室での鑑賞を行い、筆遣いを学んだ後、画題について参加者一人ひとりと話し合った。角顔彩と和筆を使い、表現方法を楽しんだ。なお、毎回すぐに予約で満たされるため、この回から定員を増やし、3日間で36人が参加した。



第10回 <平成23年度 春> 「日本画材を使って、三連作の「しおり」をつくろう！」

実施日 4月2日(土)、3日(日)

日本画の表現方法の一つに、連幅がある。清方が用いているのは主に対幅か三幅対である。しおりは表現できる画面が非常に狭いが、その狭い中に描く難しさや、関連した主題で三つの絵を描く表現方法があることを知るのを目的とした。

展示室に対幅の作品を飾り、対となる作品の左右それぞれの意味合いや、表現方法を学んでからワークシートに従って、日本画についての基本的なことを学んだ。自分のイメージしたものをいかに一つの三連作で表現するか構想を練り、画用紙に鉛筆と角顔彩・和筆を用いて描いた。予めパンチで穴を開けておいたしおりに、五色から好きな三色のリボンを選んで通し、クリアファイ

ルに挟んで展示した。

なお、会場の狭さ、人員の確保の難しさに加え、参加申し込みがすぐに一杯になってしまう状況もあり、保護者も参加したいという要望になかなか応えられなかったが、比較的参加希望人数が緩やかな春期に試験的に保護者の参加受入を試みた。2日間で11人が参加し、そのうち保護者の参加は3人であった。参加した保護者からは、制作する喜びを語られ、また参加したいという感想が寄せられた。



第11回 <平成23年度 夏> 「日本画材を使って絵を描き「掛軸」にしよう！」



実施日 7月28日(木)、29日(金)、8月5日(金)

日本画に限らず書にしても、古くから軸・卷子という形態が用いられてきた。それは保存や移動に特に優れているからである。この回では、軸という形式に焦点を当てた。市販では廉価で催せるような教材は見つからないため、市民サポートスタッフとともに製作することにした。当初、表具は布を考えていたが、絹地に描くのは予算と時間に制約がありすぎるため、美濃紙を糊で表具できる素材を探した。そこで揉んだ和紙が比較的廉価であり、しかも表具した時の反りもあまりなかったため、用いることにした。ホームセンターで購入した木の丸棒にアイボリーの水性ペイントを塗って、軸心とし、木の半円柱の細い棒にドリルで穴を開けて紐を通し、八双とした。揉んだ和紙を直線に切るのはコツがいった。参加人数より多めに軸を用意したが、かなりの労力と日数がかかった。



近年、日本間は少なくなり、床の間はさらに需要がなくなっている上、床の間がある家でも、本来の床の間としての機能を果たすことなく、物の置き場所やエアコン・ヒーターの備え場になっている場合もある。

そこで、美術館にある床の間を紹介した後、展示室で清方の軸に表具された作品を鑑賞し、線の表現や全体の色合いなどを観察した。さらに、筆遣いを学んだ後、美濃紙



に角顔彩・和筆を使って表現活動を行った。できあがった作品の裏に、参加者と一緒に刷毛でのりを施し、好みの色の表具に貼り付けた。秋に地下道ギャラリーに展示された後に返却された。3日間の開催で34人の参加者があった。



第12回 <平成24年度 春> 「日本画材を使って「貝合わせ」を作ろう！」

実施日 4月3日(火)、4日(水)

描く素材として貝を選んだ。貝合わせは古くから行われており、日本画材を使うには適した素材と感じていた。そこで、蛤を購入して、どのように下地を施せばよいか試みた。最終的にはモデリングペーストを塗布し、ジェッツを三回塗ったものを用意することにした。蛤は近隣の店登茂ゑ寿司さんにご協力いただき、必要な数を揃えることができた。

展示方法も当初からの課題であったが、牛乳パックを斜めにカットしてその上に載せ、壁面にはガンタッカーで打ち付けることにした。貝の下地、牛乳パックへの黒のペイントはどちらも三回程度塗布しなければ見栄えがよくなり、学芸員だけでは手に負えなかったため、市民サポートスタッフの方々に多大なご協力をいただいた。

当日は、貝合わせについて説明を聞き、展示室で清方の筆遣いや配色について観察し、会場で実際の運筆を学んだ後に制作した。練習用紙に二枚の貝の図柄を描き、一つの主題として表現できるよう整えてから、その後貝に描いた。

この日も、昨春と同様、保護者の参加を受け入れた。2日間の開催で、22人の参加があり、内、保護者は3人だった。(写真はJCN鎌倉の取材場面)



第13回 <平成24年度 夏> 「日本画材を使って「扇子」に絵を描こう！」

実施日 7月26日(木)、27日(金)、8月3日(金)

学校教材用の扇子を購入し、角顔彩と和筆を使って描くプログラムである。扇子にはいくつか種類があったが、二つ折りにして骨を挟んだ紙の内部は骨と紙が糊付けされていないものもあった。試筆してみると、この方が紙の跳ね返りが少なく、描きやすいことに気づいた。子ども向けには適していると考え、用いることにした。

当日は、展示室で清方作品を鑑賞してから筆遣いや配色などを学び、会場で実際の筆の使い方のレクチャーを受けた後、角顔彩と和筆を用いて描いた。

当館の子ども参加プログラムも七年になり、参加者は次々と卒業していった。そこで、高校生も参加したいという要望があり、この回は募集時点からそれに応えることにした。3日間で42人の参加があった。



4 日本画を広めるために

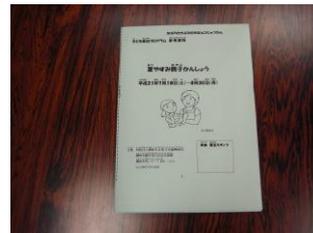
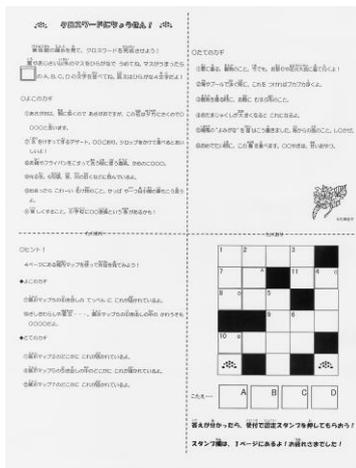
夏休み親子鑑賞

平成 18 年度の夏から、展覧会の親子鑑賞を実施した。子どもの夏休み期間に合わせることで、親子で鏗木清方の芸術の魅力に触れていただき、そのよさを分かち合っただけで欲しいとの願いがあった。

展覧会担当の学芸員が、清方と美術館の案内、展覧会の主旨や作品解説に加え、展示物に対する設問等を掲載したワークシートを作成して配布した。

また、21 年度からは、作品のキャプションと解説も子ども向けの文章を用い、イラストを添えたりしてより親しみやすい工夫を施している。

23 年度から、夏休み期間より前倒して該当する展覧会の会期全部を対象にした。なお、観覧料は小・中学生が無料の他、子ども 1 名につき同伴者 1 名無料である。



冊子『日本画を描いてみよう!』の製作

子ども参加プログラムを行っている中で、鏗木清方が描いていた日本画をもっと知りたい、もっと伝えたいという視点から、子どもにも楽しめる入門冊子を開発した。

和紙と洋紙の違いを実際に感じられるよう、絵絹とあわせて十種類の素材に触れられる頁を作った。解説は、子どもが見て楽しめる部分、親が読んで子どもに解説できる部分、さらに知りたい大人向けの部分の三段階を各章に設け、販売価格も廉価に抑えた。

この製作には、日本画家の松岡美樹子氏と廣瀬貴洋氏の好意で、制作過程の写真をご提供していただき、三澤佳子氏のイラストを加えて完成することができた。また、製作工程には印刷された冊子に和紙、洋紙、絵絹を貼る作業があり、学芸員・職員と市民サポートスタッフ等でその作業に当たった。

第一刷は 21 年度に発売を開始し、23 年度で完売。現在、第二刷になっている。



子ども参加プログラム解説書「多色刷り版画に挑もう！」

清方は、当初挿絵画家から出発しており、当館にもその頃の木版画の収蔵品は少なくない。その鮮やかな色遣いや色の配置は、絵を筆で描くということとは別に、版画印刷の技法を心得ていないと、できあがりはおぼつかなくなる。清方も最初の依頼では色版の数が少ない中で、どのようにしたら思うような配色ができるか悩み、結果も心ゆくものではなかった。木版画の技術をよく心得た上での原画制作に臨むことによって、次第に美しい作品を制作するに至った。

そこで、子ども参加プログラムでも、今では貴重になってしまった木版画が、どのように制作されるのか、図解して伝えることを試みた。しかし、予想を上回る「日本画を描いて見よう！」の販売成績のため、これは館内カラー印刷での無料配布とした。



出前 子ども参加プログラム

当美術館は職員の数が少なく、出前はかなり困難と考えていたが、当館の活動を知った博物館施設からの要望により、平成 24 年 8 月に東京都大田区への出前プログラムを行うことになった。

プログラムの内容は平成 20 年の春に行った色紙と、23 年の夏に行った軸の企画を合わせたもので



ある。軸の制作はかなりの労力を要するため、色紙に描いて、その色紙を飾るための軸に差し込んで鑑賞するプログラムである。

当日は、学芸員と日本画の講師、サポートスタッフで対応した。1 日 2 回行われ、34 人の参加があった。

参加者のほとんどが鎌木清方、及び記念館の存在を知ることなく、今回の企画をきっかけに訪れてみたいと考えたという。地元以外での活動の大切さが認識された。



鎌倉駅地下道「ギャラリー 50」での展示

子どもたちの作品を広く鑑賞していただくため、鎌倉市の市制 50 年を記念して鎌倉駅の地下道東西自由通路に設置された「ギャラリー 50」で毎回展示を行っている。作品を制作する喜びとともに、発表する喜びを味わうことができる。家族や友人をはじめ、一般の方々にも広く鑑賞していただくため、次の制作へも活かしていただきたいと考えている。

展示のスケジュールの都合で、春・夏休みが終わってから展示されるため、特に夏休みでは、自由課題として完成作品を新学期の始めに学校へ提出することはできない。その代わりに、必要に応じてワークシートを報告書代わりに使用していただいている。



レプリカの活用

平成 23 年度、《朝涼》のレプリカ(複製画)を作る機会があった。清方の作品を多くの方々に理解していただき、愛蔵していただく機会となった。清方は二流作品よりは、一流作品の印刷物や複製品を鑑賞することが大切であると語っている。

また、これを製作した、共同印刷株式会社様からレプリカをご寄贈いただき、子ども参加プログラム、並びに学芸員実習での軸の取り扱い方の説明や練習に役立たせていただいている。

市民サポートスタッフの協力

当館では、平成 18 年度より美術館運営の安定的・効率的推進を図るため、ボランティアとしての市民サポートスタッフの活動をお願いしている。当初は、展示解説や資料整理中心であったが、次第に子どもプログラムの当日の補助にはじまり、教材作りやギャラリー 50 の展示作業にもご協力いただくようになった。学芸員とスタッフがともにプログラムを思索し、協働して展開している。

子ども参加プログラムの主な流れ

当館が行ってきたこのプログラムの当日の流れを、共通する点において整理すると以下ようになる。当館ばかりではあまりにも規模が小さいため、参考にされて広く日本画の普及事業を扱う美術館等が増えていくことを望むとともに、そのお手伝いができたらと願っている。

[当日の流れ]

- ① 目的を告げる。
- ② 日本画について簡単に説明。(床の間、光に弱い、膠を使うことなど)
- ③ 美術館についての簡単な説明。(設立趣旨、展示、施設の性格)
- ④ 展示室での鑑賞。(筆使いや色使い、今回描く主題にあった内容を解説)
- ⑤ 鑑賞した時に感じたことをワークシートに書く。
- ⑥ 筆遣い、彩色の実演。
- ⑦ 下描。(特に注意することは、筆圧で紙を傷めない、消しゴムで礬砂の効果を弱めない)

- ⑧ 彩色。(特に注意することは、薄い色から塗ること。花火を描く時は色が沈まないように工夫する)
- ⑨ 仕上げ。(貝合わせにはニスを塗る。軸は表具するなど)
- ⑩ できあがった作品を同伴者やスタッフに解説。
- ⑪ ワークシートやアンケートに感想を書く。
- ⑫ できあがった作品の展示の期間と引き取り期間を伝え、解散。

おわりに

鏑木清方は、日本画家であった。しかし、現在は日本画そのものがどのように制作されるか、その課程を目にする機会はほとんどなく、日本画と触れること自体が非日常である。和紙や膠など、その素材の製造もニーズの減少により困難な状況に置かれている。

当館は、鏑木清方の記念美術館としてこれからも日本画を多くの人に親しんでいただけるよう活動を継続していく必要があると感じている。

子ども参加プログラムは、ワークショップと親子鑑賞からはじまった。その活動が広がりつつあるのは、参加者からいただいた「また開催して欲しい」という熱いメッセージと、ボランティアとして日本画の指導に当たってくださった方々や市民サポートスタッフの方々の絶え間ないお力添えがあったからであった。ここに関わられた方々のお名前を挙げさせていただき、深く感謝を申し上げたい。

(鏑木清方記念美術館 主任学芸員)

絵画指導 萩原秀雄

日本画指導 松岡美樹子、小林美絵子、上田茉莉、神戸勝史、藤田知世、中根航輔

冊子製作協力 松岡美樹子、広瀬貴洋、三澤佳子、

サポートスタッフ 鈴木佳子、三澤佳子、津久井由起子、圓佛皖司、田中理瑛子、高田彩、中西麻莉子

その他 佐藤良雄、共同印刷株式会社、登茂丞寿司

(敬称略)